

## 新版 全国衛生研究所見聞記

### 【其の7】

# 和歌山県環境衛生研究センターの巻



## はじめに (長文失禮)

訪問前日の夕刻、ゆくりなくも本誌編集部大森圭子女史から届いた「明日は宜しく」とのメールを読んだ途端に、珍しや、突然の弱気が探訪子を襲った。紀州について熊楠やら梅干やら備長炭やら蜜柑やら世俗的な知識を若干持ってはいても、醫學的の方面については何一つ知らぬ自分に氣付いて愕然としたからだ。探訪子にとって紀州は従前未踏の地であり、知己も一人だに存在しない。

大森女史からのメールの「天気予報によれば明日の和歌山県北部は晴（降水確率0%）、最高気温17℃、最低気温8℃…ご宿泊施設の設備は云々…」等といった彼女獨特の暢氣な文面が探訪子を一層不安に陥れる。「嗚呼、天気豫報リポーター女史の能天気羨ましい」と皮肉まじりに返信しつつも、出るのは溜息ばかりだ。しかしこれではイカンと窮餘の一策、和歌山縣の醫學に關する情報を少しでも蒐集しておこうとて、苦し紛れにインターネットのGoogleに「和歌山」と「醫學」の2語を入力し検索したところ、忽ちにして出て來たのは『和歌山醫學』という雑誌のURLだった。

一夜漬けの俄か勉強などやめてしまえという御託宣に違いないと觀念し、昔日の學生時代の試験前夜がそうであったように、其の夜は敢えて翌日の事を一切考えぬように努めて過ごした。しかしである。正直に白状すると、翌日の仕事を終えた後に和歌山市内の「幸太郎」という名の居酒屋で「黒牛」という名の酒を飲もうということだけは既に心に決めていた。そういう「豫習」だけは自然に出來てしまう自分の宿業が悲しい。

明るる11月17日午前、頭の中が空っぽのまま探訪子は品川から新幹線に乗り、新大阪で「スーパーくろしお」に乗り換えた。隨行の柴田典緒氏と大森

女史をば普通車に乗せ侍らせ、自らは獨りグリーン車に悠然と座して紀州を目指すという構圖は、恰も「紀州の殿様お國入り」を模する大名行列ゴッコのように思えて實に滑稽である。豫習不足の今回こそ「旅は道連れ」であるべきだった。三人鳩首を付合わせて参考書を勉強すべきだった。嗚呼實に暢氣より寧ろ怠惰という言葉こそ探訪子には相應しい。

しかし、摂洲から泉洲を経て紀州の和歌山驛に至る約1時間の鐵路の旅が、豫報どおり快晴だった窓外の景色をボンヤリと眺めているだけで終わるかにみえた其の時、スピーカーから流れて來た車掌の聲が「まもなくして紀ノ川の鐵橋を渡りますと和歌山あ〜、和歌山に到着いたします」と告げ、その「紀ノ川」という言葉が、前日から續いていた探訪子の休眠せる gray cells に電撃を走らせた。紀ノ川？…紀ノ川といえば有吉佐和子だ。有吉佐和子といえば華岡青洲だ。あっ、いたぢやないか華岡青洲が。和歌山醫學の元祖的存在が。嗚呼俺は何を寝惚けていたのだろう。それに、これは醫學者ぢやないが、本居宣長も確か紀州だった筈だ。そういえば、ランポー、ゴッホ、モーツアルト、ドストエフスキー…を貪るように読み續けた探訪子學生時代の小林秀雄遍歴は、この本居宣長に直面した途端に挫折したのだった。あの時、その「小林の宣長」を読むのを回避した報いが、今回の「紀州に關する思考停止」を生んだのかもしれない。紀州は鬼門だ！…逃げ出したくなかったが、時既に遅し、列車は既に和歌山驛プラットフォームに滑り込みつつある。

驛前のホテルに荷物を預け簡単な昼食を摂った後、タクシーで和歌山縣環境衛生研究センター（以下「和歌山環衛研」あるいは單に「環衛研」と略す）に向かった探訪子+隨行子=三名は、豫定時刻である13時30分より5分早く和歌山環衛研の門前に到

着した。この餘剰の5分間を有効に活用すべく、勤勉な随行者二人はデジカメを取り出してパシャ・パシャと環衛研の建物やその周辺を撮影し始めた。本誌本欄の恒例となった建物全景（or 前景）寫眞を撮影しておこうとの魂胆かと推察したが、後日送られて来た寫眞帖を開いてみると、掲載に足る門前寫眞は一枚もなく、その代わりに、撮影者の意圖不明なれど非常に興味深い寫眞が一枚だけ含まれていた。



寫眞1 和歌山環衛研の門前にあった「街角の地圖」。

これは、日本全國津圖浦々どこに行ってもよく見掛ける「街角の地圖」の一つであるが、一番上のところに「現在地」と書いてある場所が和歌山環衛研の門前であろうと思われる。この地圖を見て吃驚したのは、所謂「一般診療所」の数の多さである。歯科醫院と接骨院まで含めると、たったこれだけの狭い面積の中に9カ所（坂本内科、古谷醫院、今福診療所、小池胃腸科、葵町クリニック、山本歯科、神田歯科醫院、飯塚接骨院、あおい接骨院）も一般診療所が存在する！偶然だろうか…？

閑話休題ジャスト一時半、環衛研玄關先に久保義文次長が忽然と現れ、「門前の不審者」＝探訪子達を所内に招き入れて下さった。スリッパに履き替え、事務室を抜け、所長室に入る。

## (I) 異色、能辯、多趣味、行動力抜群で茶目っ氣もある岩井敏明所長との對話は所内見學の前後計6時間に及んだ

岩井敏明所長の第一聲は「探訪子どのは和歌山は初めてですか？」だった。どちらかというところワモテでダミ聲の岩井所長からの此の質問に探訪子はたじろいだ。無知を見透かされている！…勇氣を出して「御意、初めてです」と答えた。

所長の第二聲は「それはよかった！」だった。「えっ？」と探訪子。「だってその方がイントロのやり甲斐があるじゃないですか」と所長。それはそんなに違いないが、次に何が飛び出すのだろうか、なかなか警戒心が解けない探訪子。

しかし、所長の第三聲「よく云うじゃないですか、一度は行ってみたいが、一度も行かないかもしれない縣は沖縄縣と和歌山縣だって」という誘い水には素直に反應することが出来た。「これは奇遇も奇遇、私の此の訪問記の前回は沖縄で今回が和歌山。更に云えば、その沖縄の後に別件で福島に行ったのですが、そしたら福島縣知事が逮捕されて、今度は和歌山縣知事が逮捕され…」とつい餘計なことまで口走ってしまった（註：和歌山縣知事の逮捕事件というのは、下水道工事にまつわる官製談合の容疑による）。

どうやら岩井所長は透視能力の持ち主らしい。「それですよ、それ、下水道。和歌山縣の水洗便所普及率が全國第何位か御存知ですか？」と質問を發しつつソファを立ち上がり机の向こう側へ回り込み抽斗から何やら小冊子を取り出し再びソファに戻って来た岩井所長は、その小冊子のページを忙しく捲りながら「これだこれだ、和歌山縣の『水洗便所のある住宅比率（2003年度、以下同様）』はですな、全國平均が88.4%であるのに對して68.6%でしかなく全國第43位、なんとあの島根縣（72.2%で40位）より低いんですよ」。…ん？…「あの島根縣より」だって？…これは聞き捨てならぬ。「あのお岩井先生、私は島根縣出身者なのですが」と探訪子。「おお、そうでしたか、これはこれはワッハッハッハ」。豪放磊落とは岩井所長のことだ。



写真2 豪放磊落岩井敏明所長。

郷土自慢あるいは縣別比較等という話題になると黙ってはいられない田舎者が今日はもう一人いる。「あのお岩井先生、秋田縣は第何位なのでせうか？」と柴田随行子。「おお貴方は秋田縣の御出身でしたか。えーっと、秋田縣、秋田縣はというと、あっこれだ、御安心ください。64.1%で堂々たる46位です、ワッハッハッハ」と所長。「嬉しいような悲しいような…」と何故か急に秋田辯訛が出てしまう柴田氏。「ちゃあハッキリと貴方が嬉しくなる数字の一つ云いませうか」とページを捲り、「これだ、『持ち家比率』は秋田縣が堂々の全國第2位です」と所長。すかさず「島根縣は？」と聞く探訪子。「堂々の9位ですよ、和歌山縣の10位を立派に抜いています」と所長。當然の如く『民営借家比率』はこの逆のパターンで、和歌山41位、島根44位、秋田46位となっている。要するに、岩井／柴田／三代夫々の地元の人達は先祖代々の家にそのまま住み着いていることが多という、ただそれだけの話だから単純には喜べないのだが、この邊りからその三人の間には奇妙な連帯感が生まれ始めていた（東京出身の大森女史は一人蚊帳の外）。しかし、島根や秋田が「下田舎」であることは萬人の認めるところであろうが、大阪府の隣縣である和歌山縣が何故？

それには自然条件が大きく關與していると岩井所

長は云う。和歌山縣は全長600kmもの長さの海岸線で海と接している一方で、内陸の大半は森林であり、海と森の間の『可住地面積割合』は23.2%しかなく全國第42位（因みに島根縣は18.7%で46位）である。昔は逆にこの自然条件を利して漁業と林業が榮えていたが、いずれも昨今は随分と廃れ、若い労働力の縣外流出を齎した。その証拠に『老年人口割合』は23.2%で全國第13位である（因みに全國1位は島根縣）。當然の如く雇用も減った。その証拠に『従業員100人以上の事業所割合』は全國最下位の47位である（因みに46位は島根縣）。「いやあ、地元離れは非常に深刻です。就職だけじゃなくて進學もそうですからなあ。例えば『縣内大學への進學率』も全國最下位です。因みにブービーは島根縣ですけどね」と岩井所長。なんだか、和歌山縣の話聞きながら島根縣の話聞かされているようだ。

全國ビリ争いの話はこの後も延々と續いたが流石にそれは割愛する。但し一つだけ、本當に一つだけ、ビリではなくトップ争いの話を此處に書き留めさせて頂きたい。それは、人口10萬人あたりの一般診療所の数である。環衛研門前の地圖（写真1）を見て診療所の多さに吃驚したと前述したが、宜なるかな、和歌山縣は堂々の全國1位であり、第2位は島根縣であった。病院の数については夫々19位と20位だから、醫療の實効面では、開業醫の多さは全然自慢になる話ではないのだが、いつの間にか所長と探訪子は「似た者同士の親近感」からか「同病相憐」<sup>あいあわれむ</sup>からなのか無邪氣な順位争いに興じて一向に已む氣配がない。

話し好きの御殿様の傍らに控える國家老、久保次長の咳払いの回数が増えて來た。それを察したか岩井所長の「扱てそれでは我が環衛研の特徴について少し御話しておきたいと思いますが…」との發言に久保次長の顔も一瞬ほころぶ。しかし「…その前に、高野山と熊野に代表される自然の恵みと觀光資源から、和歌山縣は金額にして如何ほどの恩恵を受けているか、探訪子どのは想像がつかますか？縣民一人一人が千圓ずつ拠出しても到底追いつく金額ではないですよ」との所長發言に次長の表情は再び曇った（「いかん、また長くなる！」との危惧）。答に窮する探訪子に「それは年間約1兆圓に相當するとされています」と所長。續けて曰く「我々環衛研の仕事も此の自然の恵みと無縁じゃありません。

後で御会いになると思うが、ここには其の道で有名な『キノコ博士』もおりますし、森林浴の効果の物質的な要因を探索している研究者達もおりますからな。まあ後でゆっくりと彼等の話を聞いてやってください」。

なんと實に見事なイントロダクションの結語ではないか。久保次長も今度こそは不可逆の笑顔になった。まさに「愁眉を開く」とは此の笑顔の為に用意された言葉であると知った。

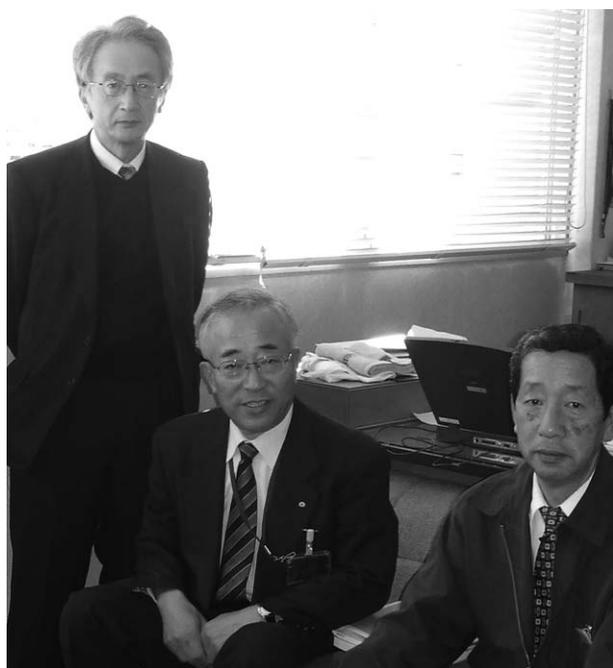


写真3 意気揚々のイントロを終えた岩井所長を中央に、ホッと安堵の久保次長(右)と、鏝(唾?) 迫り合いの前哨戦に負けて悄然たる表情の探訪子(左)。

ところで、岩井所長との會談は、見學を終えた後に和歌山市内の別の場所で續行された。探訪子は「何故に岩井所長は斯くもユニークなのか」に興味を覚えていたが、その疑問への回答をば、胸襟を開いて語り合った其の席で得ることが出来た。實に様々の事を所長から聞いて何度も吃驚したが、そのうちの四つだけを箇条書きにすれば以下の如くである。

- 岩井所長は昭和21年の和歌山生まれ、大阪大學工学部出身。衛研所長としては珍しき經歷の持ち主。環衛研でのこの「畑違いの仕事」は一年間だけのピンチヒッターとの由。
- 嘗て「本業の機械工学」の分野での仕事の一つ

として、關西空港の滑走路の向きを50°から51°へと1°だけ變えさせたことがある。

- 特段の目的もなく間伐材を1本300圓の値段で80本購入して保有していたところ、やがて『山と溪谷』に「ログハウスの作り方」が載ったのを読んで、330坪の自宅敷地内にログハウスを自分で建造した。

- 趣味は油絵、ゴルフ、釣り。

この異色、この異能、この實力力！

如何に畑違いのピンチヒッターであるとはいえ、僅か一年間だけで岩井所長を和歌山環衛研から手放すのは實に惜しい。そう思うのは探訪子だけではない筈である。

## (Ⅱ) 深刻な豫算不足?；秦壽孝衛生研究部長の部屋はエアコン不調で扇風機が三台

久保次長の先導で所内見學に旅立った探訪子達は、古くて暗い急峻な階段をよじ登り、先ずは衛生研究部の部長室を訪れた。

この部屋の主、秦壽孝先生は如何にも恰幅の良いオトノサマ然とした風貌であったが、然様な身体的特徴を裏切るかの如く、なにかしら憂いを秘めた、「翳り」のある雰囲気醸し出しておられるのが不思議だった。「ようこそ、陸の孤島、和歌山縣へ」という自嘲氣味の第一聲も其の印象を一層強く持たせた。

な、なんなんだ一體全體この怪しげな翳りの原因は?と一瞬訝しく思った探訪子であったが、直ぐに其の疑問は氷解した。理由は単純。逆光だった!のである。



写真4 衛生研究部長秦先生の逆光シルエット

秦部長の直ぐ背後には扇風機が一台鎮座ましましており、さては相當の汗かきなのかと想像させたが、見れば此の部屋には壁付きの扇風機がもう二台あるではないか。實に此の部屋の主は秦部長ではなく、三台の扇風機と大きな窓のブラインドであった。



写真5 衛生研究部部員集合写真。人物を解散させると中央にもう一台の扇風機が姿を現す。

後で岩井所長に「和歌山縣は扇風機保有台數全國第何位ですか？」と尋ねてみようかと思った矢先に、秦部長から至極まっとうな説明があった。曰く「此の部屋は西日が入るんですよ。オンボロエアコンでは到底太刀打ち出来ないぐらい強い西日がね。だから扇風機で頑張ってるんですけどね」と。…なるほど、西日が強ければ強いほど、それを背に受ける秦部長の顔は一層翳って行く理屈である。

しかし探訪子は、この「扇風機で頑張る」という言葉に、昔日の敗戦間近の大日本帝國の「竹槍で頑張る」という言葉を重ね合わせて考えてしまった。ひょっとすると和歌山環衛研はロジスティックス（兵站）が相當に逼迫して來ているのかもしれない。換言すれば、相當に「貧乏」なのではないか、と。そしてそれは和歌山環衛研だけが抱えている問題ではないのかもしれない、と。極く限られた2～3の「恵まれた衛研」を除く大半の地方衛研は、総じて研究豫算不足に喘ぎ苦しんでいるのが昨今の現實なのではないか、と…。

秦部長の、竹槍で、ぢゃなかった、扇風機で頑張るという言葉の心の中で反芻しながら然様な妄想に耽っていた探訪子であったが、やがてその眼前に、音もなく忽然と今井健二微生物グループ総括主任研究員が姿を現した。

### (Ⅲ) 衛生研究部・微生物グループ：“捗々しい研究成果は無い”と謙虚に語る今井健二総括主任研究員だが、そこちから隱然たる底力こそ衛研の命

口數少なく如何にも研究一筋といった端正な容貌の今井先生の白衣姿こそ和歌山環衛研の象徴である。のみならず、全國の「衛研」の神髓を象徴するものである、と、初対面の第一印象だけから探訪子は即断してしまった。

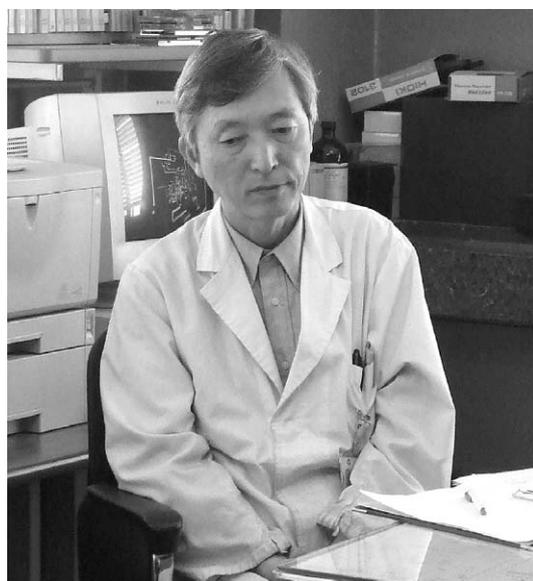


写真6 今井健二微生物グループ総括主任研究員。もの静かな立ち居振る舞いが強く印象に残った。

桑田昭研究員と寺杣文男主査から腸炎ビブリオ、日本紅斑熱、ツツガムシ、日本脳炎ウイルス等に關する「極めて地味でネガティブな調査結果」の話の聞かされた後のディスカッションの中で、探訪子は、「もし何かもっとアピール性のある研究をしたいということであれば、例えば熊野山中に棲息する猪のHEV（＝E型肝炎ウイルス）感染調査をすれば、きっと面白いデータが採れますよ。検出試薬等を供給しますから共同研究しませんか」と提案し、「それは有難い。是非そうませう」と、今井総括主任以下御一同から此の提案への賛同を得た。しかし、今から云うのも變な話だが、提案した張本人である探訪子の心には、何かしら不得要領の思いが残った。それが何故なのか、ずっと分らないでいたが、此の原稿を書き始めた昨日（2006年12月19日）邊りか

ら何となく分って来た気がする。

要するに「研究とは何ぞや？」という根源的な問いに歸する。研究の対象は「未知」である。未知を既知に変えるのが研究である。では何故、未知に挑むのか？単純には「面白いから」である。「知りたいから」である。Newtonが波打ち際で小石を拾い集める子供の例を持ち出したように、大概のサイエンティストは（探訪子も）専ら好奇心に駆動されて研究を行っている。しかし他方には、「怖いから」という理由で行う研究もある。つまり、未知を未知のまま（あるいは既知を既知のまま）放置しておくのが怖いから研究する…そういう研究もある。バイオテロに備える為の研究はその一例だ。いつ復活するかもしれない「忘れられた病原體（例えば狂犬病ウイルス）」に関する研究もこの範疇に入る。大流行を起こしかねない「平時は平凡なウイルス（例えばノロウイルス）」の研究もまた然りである。そして、国民や縣民の健康を守る為に存在する「衛研的研究」の本幹は、まさに此の「怖いから行う研究」に存するのである。だから、探訪子の如き好奇人が「面白いからHEVを一緒にやろう」などという無邪氣な提案を真摯な衛研人に對してしたのは實に「餘計なおせっかい」だったのだと、今にして思う。

本稿執筆時点で日本國中猛威を振るいつつあるノロウイルスだが、夙に今井先生達は2005年11月に田邊保健所管内の小學校で發生した集團食中毒がノロウイルス genogroup IIによるものであることを突き止め、二次感染防止の為に適切な対策を立てることを可能にした。そういうことが出来たのは、平時から有事に備えての地味な研究が為されていたからなのである。従って、腸炎ビブリオ、日本紅斑熱、ツツガムシ、日本脳炎ウイルス等に関する研究が特に報告に値する成果を生んではいけないとしても、それは平時では寧ろ當然のことであって、そういう日頃の行いこそが「隠然たる底力」を生むのだから、全く悲觀すべきことではない。即ち、衛研的研究の日常は、有事に備えて刀を研ぐ武士の日常と似ている。

使わない刀は錆びる。有事に役立たせる為には日頃から刀を研ぎ續けていなければならない。同様に、殆ど發生しない感染症だからといって、その感染症に對する研究費投入を怠れば、有事に適切な對処を為し得なくなること必定である。今井総括主任の風貌に接して「衛研の象徴」と形容した探訪子であっ

たが、今にして思えば、それは「刀研ぐ貧乏侍」の雰囲気を感じてしまったからかもしれない。

#### (IV) 衛生研究部・衛生グループの山東英幸総括主任研究員は夙に“キノコ博士”として有名だが、それだけではない

嘗ては南方熊楠が粘菌類を求めて跋涉した熊野の山中を、今や山東英幸（さんどう・ひでゆき）衛生グループ総括主任がキノコを求めて縦横に駆け巡る。キノコに関する山東総括主任の博識は夙に有名であり、キノコに関する縣民からの相談が後を絶たない。例えば、「キノコに詳しい縣環境衛生研究センターの山東英幸研究員によると“写真を見る限り、ニンギョウタケと思われる。1個のものとしては大きい。ニンギョウタケはこの時期、腐葉土が積もった山に生える。食べる場合は、そのままでは苦みがある”」とか、「山東氏によると“写真だけではモミタケかオオモミタケかは分からない。兩種ともこの時期が最盛期となる。食べられるが、あまりおいしくない”」等の相談回答事例をインターネットで簡単に見つけることが出来る。山東総括主任は那智原始林で発光性のキノコを発見した人でもあるから、粘菌とキノコの違いこそあれ「今様熊楠」と呼ぶも過言ではない。しかし誤解を生むと不可ないから敢えて記すが、山東先生は熊楠先生ほどの奇人ではない。

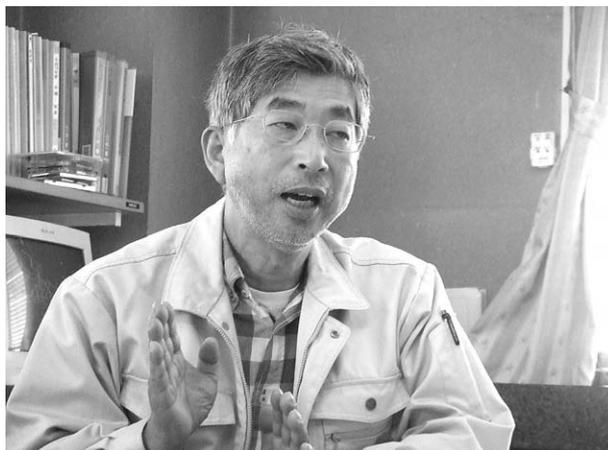


写真7 山東英幸衛生グループ総括主任研究員。  
理路整然として自信に満ちた語り口が印象深かった。

とかく「その道の大家」と呼ばれる御仁達は盲目的一事没入の弊に陥りがちだが、山東総括主任は全くそうではない。周りがよく見えている。和歌山環

衛研の将来の為に自分が何をすればよいかも見えている。そういう観点からすれば、逆の意味で、相當に不思議な人物である。

探訪子が大いに感心したことの第一は、キノコが決して蒐集趣味の対象ではないところにある。分布調査を行うことによって縣民の環境意識を高め、毒キノコの鑑別法を周知せしめることによって食の安全を確保し、もし有用キノコが見つければ以て地場産業を育成し、もし薬理作用を持つキノコが見つければ作用物質の抽出を試みるといった具合に、全てが明確なる目的意識の下で行われている。

探訪子が感心したことの今一つは、新技術の創意工夫へ向けられた彼の熱意である。和歌山縣には梅干や備長炭に代表される「縣特産ブランド品」が多数あるが、シラスも其の一つである。出荷されるシラスの安全確認のための過酸化水素試験は、食品添加物検査の観点からすれば、出来るだけ簡便な手法であることが望ましい。そこで山東先生達は、その為の新たな簡易分析キットの開発に取り組み中である（特許申請も視野の中にある）。梅干中の安息香酸の含有量についても、今は迅速蒸留法でこれを測定しているが、いずれまた新たな測定法を工夫案出されることであろう。結局、キノコにしろシラスにしろ梅干にしろ、これらは全て紀州の自然の恵みの一部である。しかし、それらの「甘受すべき恵み」を「甘受可能な恵み」に變換する為に、環衛研による斯様な努力が行なわれていることを、果たして紀州の人々は過不足なく認識しているのだろうか？

ところで、自然の恵みといえは、地底から湧き出る高温の水、温泉のことを忘れては不可ない。縣内温泉地の定点的經年調査も此の衛生グループの仕事の一つであり、嶋田尊研究員から説明を聞いた。その説明の詳細を此處には詳述しないが、「美人の湯」という言葉が出た途端に、それを聞いた大森女史の脳波が一瞬痙攣して部屋の空気が揺れたことだけは蛇足ながら記しておく。

#### (V) 環境研究部・大氣環境グループの二階健総括主任研究員等は“森のかおり”の成分抽出に挑戦中

脳波痙攣という世にも珍しき現象を體驗した餘韻にひたりつつ渡り廊下をヨロヨロ歩き別棟へと移動

した久保次長と我々客人三名は、環境研究部・大氣環境グループの二階健総括主任研究員等の待つ第3機器分析室へと入室した。岩井所長から「是非聞いてやってください」と示唆を受けた「森のかおりの成分研究」の話聞くのが主目的である。しかし、果たして、「一本の木から發散される何等かの物質が、其れを吸入した人物の体内で、ストレス解消効果あるいはリラックス効果を發揮する」ようなことが本當にあるのだろうか？ 多くの人はこれを直ちには受け入れられないだろう。探訪子もそうだ。否、正確に書けば、つい先刻までの探訪子はそうだった。しかし、脳波の痙攣が大氣を震わすという珍現象を目撃してしまった今は、何があっても驚かない。



写真 8 高野六木からの芳香分析について語る野中卓副主査（左）と、終始それをじっと聴き見守り続けた二階健総括主任（右）。

森林浴効果の物質的源泉はフィトンチッドという芳香性物質にあるとされており、一般には木や葉から抽出した精油がアロマセラピーに用いられているが、此處和歌山環衛研では、もう一步踏み込んで、そういう効果の原因となる物質を同定し精製する試みが進行中である。偶々ではあるが環衛研の近所に花王石鹸の研究所があり、花王は夙にそういう研究に関心を持っていたから、これは環衛研と花王との共同研究なのだそうだ。

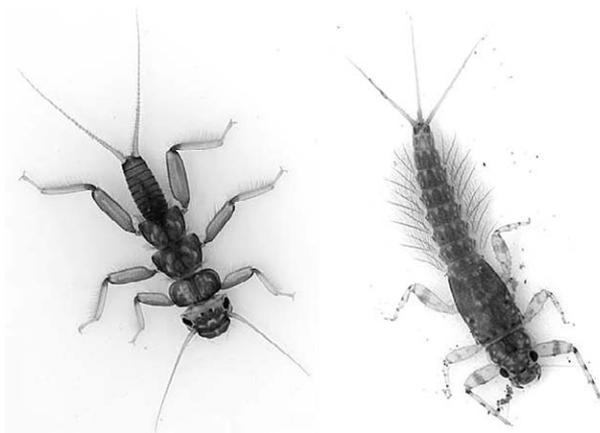
和歌山環衛研には断然「地の利」があるから、この研究は是非とも實らせて欲しいし、目的とする物質の採取・同定・精製に成功する確率は非常に高い。元來からして熊野は「癒しの地」であるし、高野山には六木りくぼくがある。此處で採れなきゃ他の何處か

らも採れないだろう、と探訪子は誰にも聞こえぬ聲で獨り呟いた。

ところで話は逸れるが、先ほどからじっと野中副主査の顔と手を眺めつつ説明を聞くうちに、どうしても發しておきたい質問が一つだけ脳裡に浮上し抑えきれなくなった。「野中先生、貴殿の肌は非常にスベスベしているが、それは美人の湯の効果なのでせうか？」と。一瞬たじろいだ野中副主査であったが、彼はこう答えてくれた。「しょっちゅう行く譯ではありませんが行ったことはあります。確かにあそこの湯には肌がツルツルになる効果があります」。探訪子は思わず野中副主査の頭を見上げ…、その過激な効果に驚いた。

## (VI) 環境研究部・水質環境グループの勝山健環境部長と中山真里研究員の體には“川の匂い”が染み付いていた

本日最後の訪問場所である水質第1實驗室を訪れた時、何か得體の知れない「柔和なもの」の存在を室内から感じ取ることが出来て、疲労氣味の探訪子の心身に安らぎを齎してくれた。それは「川」である。中山真里研究員も勿論柔和過ぎるほどに柔和な女性であったし、勝山健部長も大變柔和な温顔の持ち主であらせられたが、この部屋の柔和の根源は紛れもなく川であった。探訪子の生まれ育ったのが島根縣の山奥の斐伊川の支流の久野川という「か細き柔和な川」のほとりだったからかもしれない。

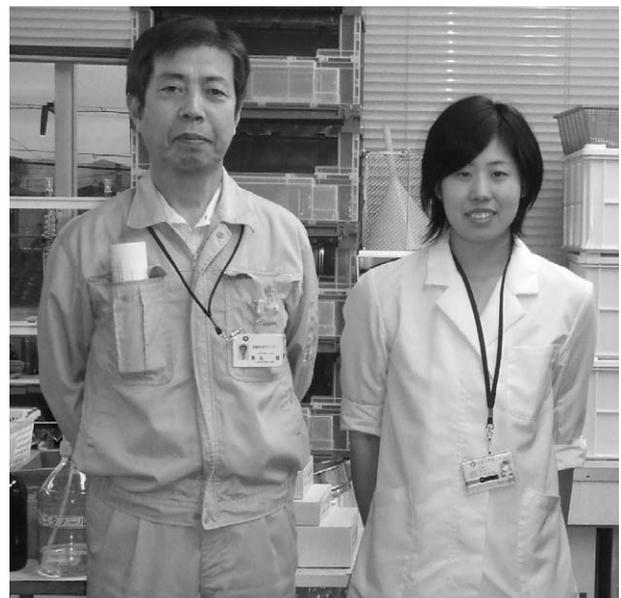


寫眞9 河川の水質評価の為の生物學的マーカーとして採集される底生動物の例。「きれいな水」に棲むカミムラカワゲラ（左）と「少し汚い水」に棲むキイロカワカゲロウ（右）。寫眞提供中山真里

この部屋には、河川の水底に棲息する生物の標本が満ち溢れていた。河川の水質を評価するには、BODや窒素や燐等を測定する「理化學試験法」も勿論あるが、もっと直裁的に、生物が棲めるか棲めないかで水質を評価する「生物學的試験法」もあり、勝山部長達は長年にわたり然様な目的の指標生物を採集し續けて来たからである。

縣内にある多数の川の56カ所に定点を設置し、「きれいな水」/「少し汚い水」/「汚い水」/「大變汚い水」の夫々に棲息適應した総計約200種類もの底生動物（寫眞9参照）を数え上げて行く其の作業は、子供達の夏休みの川遊びにも共通する、ワクワクするような楽しさを伴うのではないかと探訪子は想像した。「水底の石を蹴るんですよ。そうすると、石の表面にいた底生動物や裏側に隠れていたのが出て来ますから、それを網で採集します。キックスイープ法と呼ぶんですけどね」と中山研究員。聞くは楽しく行うは辛い作業なのかもしれないが、試薬や分析機器を全く使うことがないということ一つ取ってみても、これは大變柔和で氣持のよいメソッドである。

最後に一つ親爺ギャグを云わせて貰えば、中山さん、水に優しい貴女は實に瑞々しい！勝山部長、川に優しい貴方は實に若々しい！



寫眞10 「少し汚い水」に棲む勝山部長（左）と「きれいな水」に棲む中山研究員（右）。冗談失禮！

## おわりに

今回の和歌山は、探訪子にとって神奈川、愛知、沖縄に次ぐ第4番目の衛研訪問であった。忌憚なく愚見を披瀝すれば、建物を見ても人員規模を見ても、和歌山環衛研は他三者と較べて明らかに低リソース状態にある。一言にして云えば、不遇である。

嘆けば無限に嘆くことが出来ると思うほど、建物は古く、設備・備品は老朽化し、人員は少なく、恐らく研究予算も（給料も？）少ない。にもかかわらず、否、だからこそかもしれないが、所員の心に通底する「竹槍精神（あるいは扇風機精神）」が探訪子には強く印象に残った。即ち、例えば、キノコや底生動物の採集調査の如き「オカネのかからない研究」が此處では自発的且つ積極的に行われている。博物學に分類可能な斯様の研究が「熊楠の系譜」を引くものとして此の和歌山環衛研に存在することは實に喜ばしく、是非とも永續する伝統として今後も續けて欲しい。熊野六木からの芳香物質の分離同定精製等、「オカネのかかる研究」が他機關との共同研究で推進されていることも實に喜ばしい。過酸化水素の簡易検出キットの開発等、「特許化により将来オカネが入って来るかもしれない研究」が細々とながら實行されていることも實に喜ばしい。

しかし、しかしである。好むと好まざるとに拘らず、なんといっても此處は衛研なのだ。衛研の主たる任務の一つは「危機対応」にある。危機は忘れた頃にやってくる。危機が訪れた時に突如として幾ら大量の研究費を投入しても手遅れなのである。危機

を回避あるいは無難に切り抜ける為には、平時から危機対応力を涵養しておかねばならない。今年のビッグ・スプレッドは偶々ノロウイルスだったが、來年は狂犬病かもしれない。日本脳炎の再來だって全く有り得ない話ではない（寺杉文男主査によれば、和歌山縣での日本脳炎患者の発生は2001年が最後だが、ブタでは2005年まで毎年感染が確認されている）。症例の発生がないからという理由で豫算カットするようなことは断じてあってはならないことである。異變の感知を可及的早期に可能ならしめる為には、研究員の技能向上の為の努力が恒常的に為されるべきである。では、その為にはどうすればよいのか？オカネを投入すればよい？

勿論オカネ。しかし、地方財政が逼迫している今日此頃、簡単には縣のオカネは出ない。ではどうするか？探訪子の提案は他施設との共同研究である。世の中は広い。研究資金も潤沢で且つ「面白い研究」を行っている研究施設が数多ある。そのうちの何處かと共同研究の約束をし、其處へ所員を送り込むのである（理想は衛研同士の共同研究だが、相手は大學でも企業でもいい）。たとえ環衛研での研究テーマとは違うテーマであったとしても、其處で学ぶ技術や知識は環衛研に帰ってからもしっかり役に立つ。

おっと、探訪子はまたオセッカイなことを書いてしまったようだ。まるで、貧乏學生に「苦學の薦め」を説く下宿屋の親爺、といった風情である。次第に小言が増えて行く「寄る年波」に免じて御容赦頂きたい。

（探訪子＝三代俊治）

取材日：2006年11月17日